

連載



2026年3月の株式市場は、中東情勢の悪化などを背景に極めて厳しい相場展開となり、日経平均株価は月間で▲13.4%と大幅な下落となりました。1月・2月は大幅な上昇だったため、年初来で見れば+1.4%とまだ若干のプラスとなっているものの、3月の金融市場の混乱を受けて投資家はどのように動いたのでしょうか。3月の投資信託の資金フローから、株式相場の急落下での動きを確認したいと思います。

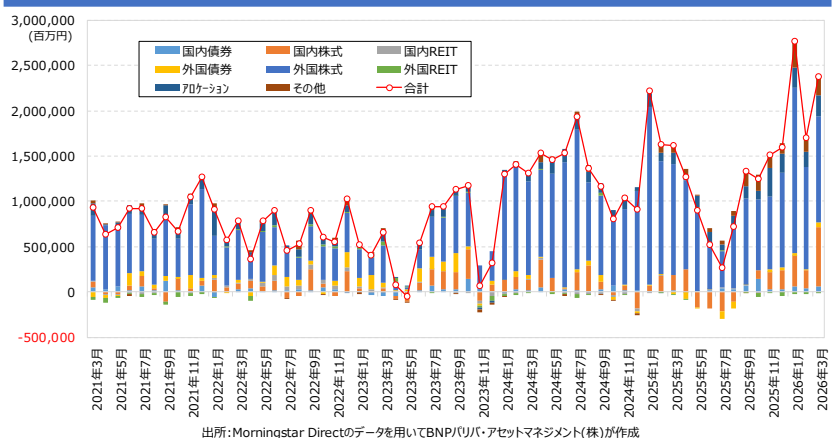
個人投資家の動向を反映する上場投資信託(ETF)を除く追加型株式投信の3月の資金フローは2兆3,700億円程度の資金流入と、2月の流入額1兆7,000億円から大幅に増加しました(図表1参照)。3月に最も資金流入が大きかった資産クラスは外国株式型の1兆1,700億円となっていますが、2月の1兆1,300億円とほぼ同水準となっています。次に資金を集めたのが国内株式型(日本株ファンド)の6,600億円程度で、2月の2,000億円から大幅に加速しています。日本株ファンドへの資金流入額が5,000億円を超えるのはリーマン・ショック後初めてで、個人投資家が日本株ファンドを通じて、株価下落に買い向かった動きが明らかになっています。なお、それ以外の資産クラスを見ると、アロケーション型とその他型が2,000億円台の資金流入となっており、好調を維持しています。その他型には金(ゴールド)関連ファンドが含まれますが、こちらも金価格が急落する中で、個人投資家が押し目買いを進めたものと思われる。

ここで日本株ファンドへの資金流入について、もう少し詳しく見

てみましょう。日本株ファンドをインデックス型とアクティブ型に分けてみると、3月の資金流入額6,600億円のうち、およそ3分の2にあたる4,500億円程度がインデックス型に向かっています(図表2参照)。とりわけ、日経平均株価に連動するインデックス型には高水準の資金が向かっており、2月のインデックス型への資金流入額が400億円程度にとどまっていたことから、日経平均株価が大きく下げた場面で逆張りの動きが強まったことになります。一方で、アクティブ型は3月に2,100億円と、2月の1,600億円から資金フローが鈍ったというわけではありません。そういった意味では、対面販売を中心とするアクティブ型の日本株ファンドにおいても、引き続き日本株相場に対して強気な見方が優勢であると考えられます。先に取り上げた金関連ファンドへの好調な資金流入を見ても、3月の金融市場の混乱を受けて、個人投資家の投資意欲は引き続き根強いものと言えそうです。

(執筆: BNPパリバ・アセットマネジメント 藤原延介)

図表1 ETF除く追加型株式投信の投資対象別 純設定額の推移(過去5年間)



図表2 国内株式型(日本株ファンド)の純設定額の推移(過去5年間)

